

官能小説

椎名次郎、七十四歳のブロード

(2013)

## 「男と女」編

### 1、不貞

「で、次郎さん、離婚の件はどうなったの？」

波江さんは紅茶を二つテーブルに並べながら私に聞いた。

「まだ、やってるよ、調停を蹴ったら、家庭裁判所に訴えられて裁判になっていたが、和解することになって、もうすぐ終わる。もう二年になるなあ」

私は楽譜とピアノを片付けながら答えた。

私と波江さんは合奏仲間で、波江さんはチェロ、私はピアノだ。一か月に一回程度、波江さんの別荘で、二人で合奏を楽しむ。数年前に協議離婚した波江さんは、別荘だったこの家を分与され、ここに住んでいる。下田の南の高級別荘地の瀟洒な建物だ。

「妻側は弁護士五人、私は弁護士雇えないから、私ひとり」

「あなたなら、一人で十分でしょ」

「まあね、裁判は数じゃあなく、公正さだ。だが公正じゃないんだよ。第一、弁護士たちを、裁判所の連中は、先生、と呼ぶんだ。調停委員たちは民間人だから許せるが、裁判官まで、先生と呼ぶ。本来なら原告代理人、と呼ぶべきだろう？ 不愉快だったから下田の家庭裁判所に電話して聞いた。そしたら、前は先生と呼んだこともあったがいまはやめています、というんだ。地方の裁判所だつてちやんと公正さに配慮してるのに、模範となるべき東京家庭裁判所ではどうなってるんだ、と抗議した」

「で？」

「こんな抗議には裁判所は絶対に反応しない。大手新聞に、先生呼ばわりは不公平だという投書があったから、裁判所にいったみんなそう感じているんだ。民間に裁判制度をひろめようとしているのに、こういうパブリックオピニオンには耳をかさないのかね。離婚裁判も月一回開かれるけど、数回で和解にする、というのが筋書きらしい。まあ裁判には不満が山ほどある。話せば長くなるから、やめとくが、いい勉強になったよ、裁判所とはいかなるところか。普通の生活していると、裁判など無縁の世界だが、実はわれわれは普通の生活してほぐんじがらめに法に縛られている、ということがよく分かった」

離婚の原因は、告訴状によれば、悪意の遺棄と不貞行為、これに對する慰謝料と離婚による財産分与である。

悪意の遺棄、とは、たとえば、ほかの女のところに走って妻子を

顧みず、養育する義務を意図的に果たさなかったことなどを指す。私の場合、人生の後半は新たな人生を生きようと、五十一歳で退職し、伊豆半島南端に家を建てて移り住んだ。妻は東京で自営の仕事を持っていたので、海が好きだった私一人でマリネジャーの事業を始めた。息子二人を大学まで出させ、とくに長男はアメリカに留学したので、経済的には苦しく、妻にも負担をかけたが、けっして悪意を持って家族を放棄したのではない。すでに家庭を持った息子二人に、裁判で、父親がいかに親としての養育の義務を果たさなかったか、という上申書を提出してきた。多分母親に強制されて書かされたのだろうが、それにしても父親にたいする許すべからざる態度だ。子だつて親を養育する義務が民法上ある。これをもって息子たちとは縁を切った。

「ところで、不貞行為で慰謝料請求されてたでしょう。あれはどうなったの？」

波江さんはテーブルの向こう側で紅茶をすすりながら、妙に真剣な表情で聞いた。

「不貞行為、つまり浮気は民法では違法行為だ。明治時代の民法の、姦通罪の名残りだね。だけど今は罰則規定がない。だから浮気された側は、傷ついたと慰謝料を請求する。面白いのは不貞行為は発覚して二十年以上たつと時効が宣言できる。時効の援用、と法律用語ではいうのだけだね。私の浮気は二十年以上まえだから、時効を援用したさ。でも慰謝料の請求権というのは永遠に消滅しない。だから、はい、払います、といつてしまつたら、時効は無効になつて、払う義務が発生する」

「へえ、そうなの」

「時効というのは、加害者が犯した罪を永遠に背負っていくのを寛恕しようという法の精神だろう。しかし本人が悪かつた、弁償しませ、という悔悟の気持や財力があれば、時効だろうとその気持ちを尊重しよう、という被害者保護の精神だね」

「ふーん」 波江さんは、なぜか考え込んでいたが、  
「実はね、私、いま不貞で訴えられてるの。あなたの話聞いてさ、くわしいようだから、相談にのつてほしくなったの」

私はまじまじと波江さんを見た。若く見えるがこの人は私とほぼ同じ年齢だ。波江さんは私の視線を避けてうつむいた。

「波江さんは離婚して独身でしょう。不貞にはなりませんよ」

「私の相手の男性がね、奥さんにばれて、奥さんが私を訴えてきたわけ」

「どうして、ばれたのです？」

「相手の奥さんというのは、私も家族ぐるみでずっと以前から夫妻

と付き合っていたからよく知っているのだけど、ひどく猜疑心が強くてね、夫の携帯に私のメールがあった。それで夫に包丁突きつけて自白させ、もうしません、と念書を書かせた」

「どうしてそんなこと知っているの？」

「あとで相手から電話掛ってきて、あんたの名前書かされたけど、絶対に迷惑かけない、と泣いて詫言った。奥さんは念書書かせて改心した夫は告訴せず、私だけに慰謝料請求がきた」

「いくら？」

「三百万円」

「で、波江さん、浮気したの？」

「いいえ」

波江さんは書類棚の引き出しを開けて、封筒を取り出すと、テールのうえに置いた。弁護士事務所の封筒で、開けると、不貞に対する慰謝料請求書と、A地方裁判所で調停を行うから出頭せよ、という文書が出てきた。

「これは調停ではないですか。調停に応じるといふことは、不貞を認めることになりますよ。これは当然無視ですね」

「でも出頭しないと、全面的に負けたことになりませんか？」

「裁判なら、出頭せず弁明もしなければ、訴状を認めたことになり、敗訴ですが、調停はそんな効力はありませんよ。民間の調停委員が相談して慰謝料を確定させよう、という魂胆です。ほっといても大丈夫。相手方が本気なら裁判に持ち込むでしょう。そのときは十分な証拠を提出しなければならぬし、浮気してないなら、なんの証拠もないでしょう」

「そう？ すこし安心した。いままでも夜も眠れなかったから」

「そういうことでその日はお開きとなった。しばらく音沙汰がなかったが、一か月ほどすると、波江さんからメールが入って、至急会いたい、といってきた。例の件になにか進展があったらしい。さすがに合奏する気はないだろうから、楽器をもたずに手ぶらで出かけた。」

波江さんにA地方裁判所から告訴状が届いた。不貞事件は裁判所に持ち込まれた。当然、不貞の事実を示す証拠が提出されているはずだが、証拠というものは、相手の男性が包丁突きつけられて書かされた念書が一通。つまり自白書だ。あとは、波江さんからの相手の男性の携帯に送ったメールの文書の末尾にハートマークがついていた、と述べた上申書があった。

「波江さん、ハートマークつけたメールってどんな内容？」

「相手が忙しくて好きな音楽CD買いにいけなから、街に出たついでに折に買ってこれ、と頼まれていたので、買いましたよ、というメールを送った。そのCDが愛の遍歴、というタイトルだった

「から、そこにハートマークをつけた」

「なんだ、愛してるわよハートマーク、じゃあないの。だったら浮気のなんの証拠にもならない。それにこの相手の念書だって、脅迫されて書いた、とだってたでしよう。脅迫されて書いたのなら、自白の効力はないし、波江さん自身は自白してないんだから、一方的な証拠にすぎないな。もしかしたら、夫婦でグルになって、波江さんから三百万円搾取しようとする陰謀かも？」

「そういえば、最近あの人の事業、うまくいってないみたいだし」「裁判だから、今度は無視できませんよ。答弁書を書いて出頭しなければなりませんね。弁護士に頼むのが本来だが、私が経験を生かして答弁書を書いてあげましょうか。弁護士資格がなくとも、答弁書書くのは問題ないけど、代理人にはなれないから出頭は波江さん自身がいなければなりませんよ」

「という次第で、私が波江さんの不貞裁判に巻き込まれる羽目になった。」

このあと数回裁判が開かれた。初回はただ名前などを確認するだけの形式的な法廷だったが、裁判官が年配のおじいちゃんで、弁護士が若い頼りない青年だったのを知って波江さんは本来の大胆不敵さを取り戻し、テーブルを叩いてやりあうようになり、帰ってくる時、面白かった！というようになつた。

この裁判は、滑稽で意外な決着となるのだが、かいつまんで経緯を紹介する。

まず、私は最初の答弁書にこう書いた。

「証拠の念書の信頼性がない。あちこち誤字があり、念書なら本来あるべき印鑑も拇印もない」

「ハートマークがあるメールにより不貞が立証されるなら、世の中不貞だらけになる。もしこれが証拠として取り上げられるなら、この裁判は歴史に残るであろう」

そして波江さんが出廷したときに、裁判官に次の二点の質問するように強く頼んでおいた。

「私は不貞で訴えられていますが一休不貞とはどんな行為をさすのでしよう。手を握った、キスした、と男女の関係にはいろいろ程度がありますが、どの程度の接触を不貞というのでしょうか。これが明確に提示されませんか、返答もできません」。

「不貞が性交を指すとして、私はもう七十歳近い女です。相手とされる男性も七十五歳です。そんな男女が、性交可能だと思いませんか」

私はほくそ笑んだ。法廷で裁判官はどのように答えるだろうか、二回目の裁判の結果を心待ちした。

波江さんが帰ってきて報告した。

裁判官は波江さんの一つ目の質問に答え、モモを触る、手を突っ込む、口を使う、などなど、克明に身振りを交えて不貞とみなされる性行為をやって見せたという。さらに二つ目の質問には、裁判官みずから六十五歳であるが、いまもってピンピンだよ、と性能力を誇示したそうだ。

この裁判官は大した役者だ。

このままでは進展がない。証拠不十分で終了するかと思っただが、原告側は最後の証拠を突きつけてきた。ホテルの宿泊証明書で、十回ほど、相手男性の名義で二名が宿泊した記録だ。波江さんを問いただしたが、そのホテルは娘の家の近くで、ときどき一人で利用したことがあるが、その記録には覚えがない、という。

私は証明書を調べた。まず、証明書の発行日付が最近になっている。証明書にホテルの名はプリントしてあるが、印鑑がない。そこで、私は記載されている電話番号を呼び出した。弁護士だと名乗り、裁判の証拠としておたくのホテルの証明書が提示されたので、その件について調査している、と騙った。

ホテルは個人の宿泊記録を外部に公開してはならないのではないのか、

さらに、証明書の日付が最近になっているのはなぜか。

さらに、証明書に印がないのはなぜか、と詰め寄った。すると電話口の受付が支配人にかわり、そのような証明書はわがホテルでは発行した覚えがない。また何らかの証明書を発行するとしても、必ず印を押す。

やった！

「波江さん、次回の法廷にはわざと上申書を書かないから、この事実を口頭でいってください。証拠ねつ造の疑いがある。証拠をねつ造された裁判なら無効ですからね！」

裁判所から波江さんが意気揚々と帰ってきた。

「どうだった？」

「弁護士がふるえていましたよ。あのホテルの証明書は、原告もよく仕事で使うそうで、確定申告に出したいのだが、紛失したので再発行してもらったものだ、と白状しました」

これで決まりだ。

この裁判には落ちがある

実は裁判官は浮気相手の男性と顔見知りらしい。互いに犬の散歩で出会う。あるとき両者が朝の、散歩で顔を合わせ、密談をし、相手に五十万円を出させることにした。この金は波江さんが出すものにして、裁判は五十万円で和解、ということになった。

波江さんは交通費だけの出費で、慰謝料は相手からの五十万円の裏金で済んだのである。

こんな粋な計らいをする裁判官も存在するんだ、と私は自分の苦々しい裁判での裁判官（中年の女性だった）の悪いイメージをすこし払しょくした。

波江さんはいま、安心して一人でチェロを弾いている。バッハの無伴奏組曲だが、なかなかうまい。女性がチェロを抱えている姿は、だれかを抱いているようで、ときどき恍惚の表情するから、なんとなく猥褻なイメージを受ける。

私は波江さんの前に椅子を引き寄せて、演奏の合間にそっと聞いた。

「波江さん、本当に浮気しなかったの？」

「どうしてそう思う？」

「相手の男性が五十万円出したのが、不可解なんだ」

波江さんはチェロの弓を置いて指を数えるように折り、それから両手をひろげて、

「このくらいやったかな」といった。

女性も男性も年には関係なく愛し合うものだ。おおくの人間の愛憎を扱ってきた老裁判官は、それをやすやすと見抜いて、相手をゆすったわけだ。

## 2、浮気

田中「ほかの女と浮気して帰ると、うちのかみさんに必ずバレるんだ。もちろん、否定する。強く否定するとかえって怪しまれるから、とぼける。かみさんだって、怪しいと思っただけでも心の中では否定されたいのさ。けどね、浮気したときは、ぴったり当てられないんだ。はずれがない。もちろん、香水とか、パンツが裏じやないか、とか、長い髪の毛ついてないか、とか口紅とか、細心の注意をはらってチェックし、絶対に大丈夫だ、と確認して帰るんだけどね。それでもズバリ当てられる。一体どうして分かるんだろう。女のカンは鋭いというが、それだけで、こんなの中するわけがないよなあ。おい、村ちゃん、もういっぱい注いでくれ」

村田「で、その浮気相手は一定の女かい」

田中「いや、いろいろだ。だからますます不思議なんだ」

村田「証拠がなければ、シラを切り通せばいいだろう」

田中「でもさ、男というのはバカだよな。ましておれは理性が強いだろう。この理性がアダになるんだ」

村田「あんたに理性なんかあったかね。理性があれば、もうすこしバレない手だてを考えるだろう」

田中「いや、理性があるから、なぜだ、なぜバレるんだ、という疑問がわいてくる。人間の文明の発達はすべて男のこの理性が生む疑問によって発展した。リングゴが落ちる。なぜだ、なぜなんだ、とニュートンは疑問を抱いた。そこから万有引力の法則が見出された。そうだろう？」

村田「だけど、ニュートンは浮気をしなかったろう。本当の理性のあるやつは浮気などしないさ」

田中「しかし科学者ではない人間のおれは、疑問にさいなまれた。なぜだ、なぜだ、なぜだろう。・・ついにおれはこの疑問に屈した」

村田「どうしたんだ？」

田中「あるときね、やはり浮気して帰るとき、あなた、浮気してきたでしょう、と、かみさんが確信を持っていうんだ。まいったね。ついにおれは白旗を挙げた。そしていった。白状する。だがひとつだけ、どうしても知りたいことがあるんだ。おまえ、おれが浮気してくると、一体どうして分かるんだ？　おい、村ちゃん、もう一杯頼むよ」

村田「まだコップに入っているだろう。で、なんていった？　かみさん」

田中「うん、こういった。そりゃわかるわよ、浮気してくると、あなたの膝頭が擦れて赤くなっているんですもの」



村田「あんたが膝を擦って一生懸命している姿を想像すると、滑稽だね。おれなんか、背中に爪痕立てられたの知らなくて、女房に刺されたの、その背中？と詰め寄せられ、しどろもどろになった。虫に刺されそうになったから掻きむしった、といったら、じゃあ、掻いてみて、というんだ。背中に手をまわしたら、その爪痕には届かない。だけど、絶対に女だ、といわなかった。白状したら一卷の終わりだ」

鈴木「黙って聞いていたが、村田も田中もかわいいもんだ。おれのところはもっと恐ろしい」

村田「お前は恐妻家だからな」

鈴木「おれが恐れるのは、女の執念だ。五反田の怪しいサロンで遊んできてさ、帰ったら、女房が背広を脱がせてくれて、ハンガーにかけた。そのついでに内ポケットを探った。そのサロンで遊んだ女の名刺が出てきた。もちろん源氏名だけさ、また指名してもらいたいから、名刺を渡すからな。名刺を眺めて、なあに、このなんとかサロンと早苗ちゃんというの？ いや、なに、会社の付き合いでね、取引先の田中に誘われてちよいと寄った店さ」

田中「おい、どうして俺の名前を出すんだ？」

鈴木「お前はうちのやつに信頼があるからな。どんな店？ 何するところ？ としつこい。いい加減に答えていると、じゃあ田中さんに聞いてみるわ、と追及の手を休めない。田中、お前のところうちのやつから、電話あった？」

田中「あるわけ、ないだろ。おれは無実だし」

鈴木「ところがさ、うちのやつ、名刺にあったサロンに電話したんだ」

田中「へえ、その源氏名の女を呼びました？」

鈴木「違う、違う。電話したのは昼間だ」

田中「昼間になんで電話したんだ？」

鈴木「昼間はマネジャーがでるだろ。そこで、私、その店で働きたいのですけど、どんなことをするのでしょう？」

村田「わ、それは怖ろしいな。仕事内容を聞いただけならいいけど、本気でその店に働きたいってさ、鈴木がまた来るのを待っていたりしてさ。どぎついお化粧して、すけすけのネグリジェ姿でさ。待ってたわよお、なんてね。こうなると怪談だなあ」

怪談はエスカレートし、ますます猥談になっていったが、続きはやめておこう。

私たちヨット仲間はヨットで伊豆半島を半周し、須崎のある入り江に投錨して、夜が更けるまで船上で酒を交わしていた。キャビン・トークだから、半分は眉唾、と思っていただけだ。

### 3、クリコさん

クリコさんは私より三十三歳年下だ。中伊豆のリハビリ病院に勤務していたが、海が好きで私のヨットクラブを訪ねてきたのが始まりだ。あのとき、クリコさんは二十五歳、私は五十八歳だった。大柄で屈託がなく、化粧もしたことはないし、日焼け止めなどもない。中伊豆女子相撲大会で二度優勝し、横綱となった。セーリングなどウインチなしでトップまで上げる怪力だ。

色気はないが、ヨット乗りにまことにふさわしい。

岡山の出身で瀬戸内海の海しか知らないから、駿河湾の荒々しい波に仰天した。いったったか、式根島からヨットで帰ってくるときに台風くずれの大波を頭からかぶりつづけ、恐怖のあまり、知っている歌を全部歌った。生まれ変わったらオペラ歌手になりたい、といつもいつているくらいだから、まんざら下手でなかったのが救いだった。

クリコという珍しい名は、九梨子と書く。お父さんが名前を考えると、庭の梨の木に九個、実が残っていたのを見て思いついたそう。黒沢明の映画、椿三十郎、のようだな、と私は笑ったが、意味が分からず

「え？」といったが、

「いい名前だよ」と褒めた。

クリコさんは動物が好きだ。携帯に実家で飼っている犬や猫の写真を入れて、ときどき眺めては、キヨちゃん、かわいいね、などと、つぶやいている。

私が離婚裁判で二年間、ほぼ毎月上京したが、よく一緒に連れていった。裁判を待つ間、クリコさんは上野動物園で時間を過ごす。しかも、こども専用の小動物のコーナーがとくに気に入っている。ヤギさん。羊さん、豚さん、ポニーさんがいて、触ったりできるからだ。背中や顎の下をなでるととても気持ちがいい、という。動物がよろこぶの？と聞くと、燈物だけでなく、クリコさんが気持ちいいんだそうだ。

「君も触られたいの？」と聞くと、

「うん、なでてほしい」と顔を突き出す。

頬や顎の下をなでなでしてやった。だんだんうっとりしてきて、

「何してもいいよ」と、いった。

私は少し興奮した。こういうわれれば男はだれでもあらぬことを想像する。

「本当かい？」

「うん」

私は手をそっと下げて胸のふくらみを触った。

「何するんです！ やめてください」と、クリコさんは叫び、私の手を払いのけた。

「だって、何してもいい、というから・・・」

クリコさんは動物になったつもりで、何してもいい、といったらしい。愛は誤解から生まれる。

だが、私も長いこと男をやってきた。そんなことではひるまない。時間をかけて、胸のふくらみを触るともつと気持ちがいい、ことを理解させた。

それから、さらに下のほうも・・・

そういうわけで、はるかな年の差の男と女は、私の離婚が成立してから、伊豆の家と一緒に住むようになった。

朝、ゴミを出しに行くときも、買い物に行くときも、ゴルフの練習に行くときも、いつも一緒なので、近所の人たちから。仲がいいね、といわれる。

クリコさんは、私のバラ庭園のはずれの敷地を開墾し、畑で野菜を作っている。力があるから、土仕事には向いている。

裁判を経て、結婚が、法が、いかに人間を束縛しているか、を痛感した。自由意思で、年齢に関係なく、生物一般に共通な親和力によつて、男と女が自然に暮らすという生き方に、私はいま、満足し、幸せである。

愛は結婚より面白い。小説が歴史より面白いように。

カーライル（イギリス）

## 「死について」編

### 1、友の死

私が二十七年勤務した放送局の先輩、Yとは親しかった。私より少し年上で、京都大学でフランス文学を専攻したインテリだった。私が早期退職したあとすぐ、彼も定年退職したので、ときどき伊豆の私の家に遊びに来て、よく碁をやった。雨に降りこめられ、三日立て続けに打ったこともあったが、私が一度も負けた記憶はない。喉頭癌の手術を数度受け、今度再発したら終わりだ、といっていた。ところが奥さんも癌になり、二人で闘病生活を強いられる不幸に見舞われた。そういうわけで、伊豆に当分来れなくなった。一年ほど音信がなかったので、年賀状を出して安否を探したが、返信がなかった。

春になって、奥さんから葉書がきた。

「夫は一年ほど前に病死。伊豆山の墓地に眠っております。生前のご交誼に感謝いたします」

と簡潔に書かれていた。私は驚き、悲しみ、すぐにミュンヘン在住のマキシムにメールを送り、

「Yが死んだのを知っていたか」と、尋ねた。

マキシムは、私とYの共通の友人で、英国人の作家だ。オクスフォード大学を首席で卒業したあと、英国を嫌って日本にやってきた。アルバイトで放送関係の翻訳をやっていて私と知り合い、またYと別の仕事で知り合った。

私もマキシムもそのころは血気盛んで意気投合し、新宿のゴールデン街という、今は無き怪しい飲み屋街に毎晩繰り出し、狭いバーで肩を寄せて大声で激論した。マキシムの天才的才能はこうして、流暢な日本語と酒に浪費された。

その時の体験をもとに書いた英文の小説が、水商売の裏世界から見た珍しい日本文化論、と注目され、ベストセラーになった。そしてその日本語版の翻訳をYが担当した次第だ。

マキシムからすぐ長文のメールが届いた。

「Dear JIRO

君からメールもらうといつもわくわくするよ。あの新宿での放蕩の日々、それを思い出すからね。なんと自由で楽しかったことか！また、一緒に飲みたいな。

Yは去年、ミュンヘンに来たいといっていたが、その一か月後に亡くなった。夕食のときに脳卒中で倒れた。酒が原因ではないか、

と思う。夫婦だけで客はいなかったそうだ。

亡くなった様子を知らせてきたのは、Yの息子だ。死後二十四時間後に電話があつて、電報を打ってほしい、と頼んできた。

電報？

そう。父への弔辞です。手紙のように書いてください。父についての手紙ではなく、父に当てた手紙、まだ生きている父に語りかけるような調子で。電報は午前十一時の葬儀に間に合うように送ってほしい。

え？日本時間の十一時はヨーロッパでは朝の三時ですよ、電報局を探したとしても、時間外でやってないしね。

では、インターネットを調べて、日本から電報を打てるサービスを探してほしい。

私は絶句した。でも息子がいかに必死だったかを思い直し、日本の友人のMに電話をかけ、事情を話し、メールでテキストを送るか、それを日本国内の電話局から弔電を打ってくれないか、と頼んだ。Mは十秒ほど考え、よしわかった。君のテキストを葬儀に持参し、その場で私自ら読んであげよう。

やった！さすが日本だ。

私はテキストをメールで送った。日本時間の朝一時ごろ、Mは電話をかけてきて、英文を日本語に訳すニュースなどを相談した。六、七時間後、多分ほとんど眠らなかつただろうが、Mは葬儀に出かけた。東京は広いから、式場まで二時間はかかつたろう。

後日、Mが報告してきたところによると、参列者は十人くらい、大学の古い友人だけだつたそうだ。もとの職場の人間はだれもいなかった。息子の説明では父は付き合いが悪いひとだつたそうだ。Yは自分の死を知らせたくなかつたのではないか。密葬というのかね。君にも知らせがなかつたし、私だつて息子が弔電を求めなかつたら、連絡がなかつたろうと思う。息子が弔電を求めたのは、父の葬儀に箔をつけたかつた、京都大学関係者に父が国際的な交流があつた、ということを示したかつたのだろう。

最後に、私が書いた弔電の内容の一部を紹介するよ。弔辞の前半はありきたりの交友の紹介だし、君もわれわれの関係は知っているから割愛するが、Yとのある特異な思い出について、君にも知ってもらいたい」

（添付された弔辞の抜粋）

1998年、君は退職していたが、クリスマスに、私の五十歳の誕生日を祝いにババリアに来てくれた。そこで、君はサンタクロー

スに扮して皆を笑わせ、袋からプレゼントを配った。私には誕生日のプレゼントでもあるし、高価なものを期待したが、ぺらぺらの安

っぽい紙に包んだひどく軽いものだった。

開けてご覧、というから、紙包みを開いてみると、手ぬぐいのような白い細長い布が一枚だけ。片方に紐がついている。なんだ、これ？

ふんどしだよ！ マキシム、君が鎌倉の我が家に来た時、ふんどしがほしいなあ、と行ってただろう。あれから探したけど、売っていないんだな。そしたらかみさんが、私が縫ってあげる、といって縫った。つけ方は簡単だから説明しないけど、ここで穿いちやあだめだよ。

この布の恥のほうに墨でなにか書いてあるな、ひらかなで、たまはずれ、と読める。これはどういう意味だ？、と私は訊きました。

この意味を知っている日本人はすくないよ、とYはいった。

戦争中、南方の戦場では日本兵はふんどし姿で戦った。彼らはおまじないに、自分のふんどしに、たまはずれ、と書いた。鉄砲の玉に当たらないように、さ。だって細いふんどしは自分のタマがすぐはみ出し、はずれやすいだろう。弾とタマを引っかけたのさ。

ご参列のみなさん、葬儀にこんな不謹慎な話を持ち出すのをお許しくください。しかし、私にとってYとの多くの思い出のなかで、このことは忘れることができせん。外国人の私が、気まぐれに、ほしいなといったひとことを、Yは一生懸命探し、結局奥様が手づくりしてくれたこのプレゼントこそ、ご夫妻の温かい心情のあらわれである。私は生涯心に刻んでいるのです。

君の訃報に接し、私は引き出しから大切にしまっていたふんどしを取り出しました。まっしろな布を壁にかけ、その前で最敬礼して、冥福を祈りました。

不幸にして君のほうに先に玉に当たってしまったのですが、私はこのたまはずれのご利益で、もうしばらく生を続けられます。

ありがとうございます、Yよ、さようなら、

## 2、あるバラの死

伊豆半島南の海に向かう傾斜地に、庭園を造る気になったのは、チャールズ皇太子がウェールズの自分の領地に素晴らしい庭を作っている記事と写真をガーデニングの雑誌で見たからだ。その土地から失われつつのある本来の自然と植生を保全するというオーガニックな思想で管理された広大な庭だった。

わが敷地は五百坪ほどだからとても広さはかなわないが、妻良湾の沖合、岩礁と小島が綾なす風景は見あきることがなかった。霧がかかるのと、一層幻想的に見えた。

ここに庭を作り、バラの花の向こうに海が見える・チャールズ皇太子の庭でもこのような美しい海の風景はない。きつと悔しがる。海とバラ、このような恵まれた風景を持つものの、特権と義務、ノブレス・オブリージュだ。そう夢見て、庭を作り始めたが、そう安易ではなかった。骨身を削る仕事だ。土を掘り石を動かし、樹を切る。切るだけでは樹は死なない。そこで根まで殺さなければならぬ。根が枯死するまで十年はかかる。

だが少しづつ庭は広がり、広がったところにバラを買ってきては植えた。しかし、バラはそう簡単には育たなかった。二十五年が過ぎて、少しは庭らしくなってきた。

最初に植えたバラは、ここに移り住んですぐ植えたものだ。名を知らない古株のバラで、その後、凶鑑などで調べたが、特定できなかった。それは父から遺言されて私に託されたバラだった。

父は英国生活が長かったせいで、退官後帰国して房総に住み、イングリッシュガーデンに精出して余生を楽しんでいた。

亡くなってから庭の敷地は人手に渡ったが、執着していたこのバラが遺言で私に残された。バラを遺言されたのは世界でも前例がないだろう。

遺言されたものだから捨てるわけにいかなかった。移植されて、土になじむのにも歳月がかかる。気まぐれに年に一度、花を一つ二つ見せた。

花芯にむかって淡いアプリコット色が濃さを増していくデリケートな色合い、やわらかに包み込むような花弁が徐々に開くと、白いコスチュームをまとったバレリーナが宙に舞い上がったような印象を受ける。香りも強く芳醇で、うっとりとするほど魅惑的だった。しかしここ数年花を咲かせなかった。台風で根を割られてダメーシを受けたのだろう。

六月も末になって雨季も近かった。

その日は快晴で、空が駿河湾の海の青さとつながって眼前に広がっていた。庭のバラはほぼ咲き終わっていた。ふと風の中に、強い芳香を感じた。

香りをたどると、あの遺言バラだった。久しぶりに花を開いた恥じらいを見せて、葉の陰でひっそりと咲いていた。

私がこれからわが庭のバラ園の盛衰について以下少々冗漫に記す。それはのちに起きたこの遺言バラの不思議な出来事を理解してもらうための、バラ一般についての予備知識を持っていただけいたためである。

話は二年前の六月にさかのぼるが、猛烈な台風が伊豆半島を直撃した。駿河湾に開いた庭は、台風となると、猛烈な風にさらされる。いままでいくたび、小屋を吹き飛ばされ、樹木がなき倒されたことか。

台風が伊豆半島の南岸を、つまりこの地の真上を通過するケースは年に一、二度ある。今回も急に進路を変えて台風が襲ってきた。猛烈な風で、窓に叩きつける雨水の間から、森が、折れるかとはかりに幹を曲げて風に屈してひれ伏しているのが見えた。

去った後、恐る恐る庭に出た。バラたちは葉を一枚残らず吹きちぎられ、枝は折られた。遺言バラも老化して瘤だらけだった大きな根元を割られた。

海辺の風の力は想像を絶する。田子湾の漁船ですら風にあおられて転覆した。それを思うとこんな細かい枝の植物が激風に耐えたこととがけなげに思えてきた。そこで折れた部分を剪定したり、支柱を立てたり、すこし手入れをした。

夏の日差しが増すにつれてあたらしい枝を伸ばし新芽を出して葉を広げはじめた。緑色の若葉はみずみずしい。穢れを知らないものは、穢れに弱い。台風で空中に飛散した病原菌にたちまち感染し、みにくく黄変しはじめた。今度は病原で裸になってしまった。

まったくその年は台風の当たり年だ。八月になると、また大型の台風が伊豆半島に進路を向けた。

ふたたびバラは打ちのめされた。もう瀕死の状態だ。わずかに残っていた葉も、伸ばし始めた枝も消えうせた。

私はその無残な姿を見て、心が痛んだ。バラたちに同情した。まもなく秋が訪れ、葉もまばらしか出てないのに、いくつかの株に花が咲いた。

私はバラたちの健気な生命力にうたれ、つぶやいた。  
「よし、お前たち、復活させてやるからな」



バラはその時、三十種以上あったと思う。

いままで自然放任主義だった。肥料もあまりやらず、防除の農薬は一切散布したことがない。

これからは本格的に手入れをし、庭中を花と香りでいっぱいにしてやるぞ。植えた以上お前たちの生命に私は責任がある。

バラ関連の本に首を突っ込み、インターネットで情報を漁った。世界には星の数ほどバラ愛好家（ロザリアン）が存在しネット上には膨大な情報がある。

伊豆半島にもいくつか大きなバラ園がある。それらのバラ園や園芸店に行つて観察したり教えてもらったりした。冬、見物者もない風だけが吹き抜けるバラ園で、剪定されたバラたちを座り込んで観察した。剪定はバラ育成の決定的な手段である。剪定方法とその理論は様々だ。しかし、バラが他の樹と決定的に異なるのは、剪定によつて若返る。

結論からいえば、結局だれもはつきり分かっていないのだ。灌水、施肥、防除について確立されたマニュアルがあるが、その通りやつても必ずしもうまくいかない。ほとんどの人が挫折する。植えてある場所や地形、土質、気候、衛生など、環境が異なるからだろう。しかし私はバラについてかき集めた雑駁な知識から、植物について、重要なことを再認識した。といつても中学校で学ぶべきごく基礎的な知識なのだけけれど。

太陽光と水。

この二つから有機物を生成し、地球に満ちあふれさせたのは植物である。動物はこの有機物に依存して生きている。

水は大地から根から吸収され、植物の体内を通り、葉に至り、太陽光と炭酸ガスに接して光合成を行う。このとき水の蒸散によつて生じる負圧の力で、水は百メートル以上の大樹でも上昇できる。

樹は垂直な大河だ。

水は幹を上方に流れ、腕を広げ、光を迎える。

と、ボードレールは詩的表現をしたが、科学的にも正しかった。水はたんに根や植物の乾燥を防ぐのではなく、植物が自らを形づくる、成長する材料そのものなのだ（動物でいえば食物にあたる）。その認識に基づき、私はさんさんと太陽の光が降り注ぐときは、ホースで水をあふれるほどたっぷり与えた。つまり、餌をうんとやっていたわけだ。

園芸では、葉に水をかけてはならない、午後以降に灌水してはならない、軟弱になるから水をやりすぎるといふのがルールだ。

しかし、光と水をたっぷり浴びたバラたちは、葉を輝かせて、歓喜する。根がいかにも栄養を摂取するかについても興味深い。植物の根は、ある菌と共生しなければリンを吸収できない。土壌中の無数の菌が植物と共生関係にある。

春、近くの乗馬クラブからトラックいっぱい馬糞を、たい肥用にもらってきた。クリコさんが荷台に乗って山盛りの馬糞に長靴を突っ込み、スコップでならしながら、

「わあ、あつたかくて気持ちがいい」と声をあげた。

馬糞は馬が消化し残した飼料の藁が発酵し、手ですくうとふわふわで温かい。悪臭はない。牛は反芻するから、消化し残しはない。だから馬糞と牛糞は成分がことなる。日本では馬糞は手に入りにくい。英国では、馬糞はいらんかね、と馬糞売りが朝、まわってくる。さすがに馬の国だ。

バラ生育者にとって最も深刻な悩みは病害虫であり、防除のための薬剤使用を強いられる。商業バラ園は大量の薬剤散布なしでは成り立たない。

植物が病原菌に対しどのように対抗するか、科学的知見が進んだのは近年のことだ。動物と違って抗体や血管を持たない植物は、独自の三つの方法で病原菌に対抗する。

第一は局所的かつ緊急な手段で、葉の感染場所を自殺（アトポーシス）させる。感染場所を自ら破壊し脱落させる。

第二の手段は、菌が組織全体に回らないように木全体として、防衛手段を講じる。落葉させる。

第三の手段は、植物学でアレロパシーと呼ぶが、近隣の植物同士が危険情報を交換し連携して対抗する。どのような手段で情報交換するかは解明されていないようだ。

私は薬剤を一切使用しない主義なので、植物学の免疫の知見を自分なりに解釈援用し、植物自らの防御手段を活用するもっとも単純で安全な方法にたどりついた。その方法の有効性について触れたウェブサイトに世界にたった一つしかなかった。

おそらくバラを育てるものはだれでも自分流儀を工夫発見し、それを実践している。それは他でも通用するものもあれば、その栽培地だけしか通用しないものもある。私も自分なりの流儀を探し求め試行錯誤した。それが正しいかどうか、結果次第だ。

つぎの一年間、さらに数十種類のバラを加え、五十種近くに増えた。バラ園を見てまわると、どうしても惚れて欲しくなる種が出てくるのだ。

五月、ほどほどの開花がすむと、黒点病が、待ってました、とばかりに襲ってきた。バラたちは葉を落とし、丸裸にされつづけた。

しかし新芽を膨らませてせつせと活発に再生し茂っていった。病気に侵されて枯れる部分より、再生する部分のほうが多くなつた。夏を迎え、小さな台風もやり過ぎ、シュート（新梢）をつぎつぎと伸ばし、たくましく成長していった。クライミンググロウズたちは伸び放題に枝を広げ、アーチやトリスを作つてやると、そこに這い上がった。庭は、地面から空中に展開した。

いつのまにか病害虫も姿を消していった。バラは、葉が枝から出る付け根に潜在的な成長点を持っている。葉を一式落としても付け根から新しい芽を出す。花が終わったあと、その下の成長点で切り落とすと、新たに花芽を出し、また開花する。剪定が新しい枝を伸ばし枝先に花を咲かせる。こうして、バラは人為的な剪定、意図的な管理によつて四季を通じて花を咲かせることができる。

このような四季咲きの種や、つるバラは一回だけしか咲かないが、ひたすら枝を伸ばすことにまず専念し、長い枝に沿つて来年に花を蓄える種もある。

私は毎朝、起きるとすぐ庭に出てバラたちを見回るのが日課になつた。小さな生命が日々、芽ぶき、変容し、麗しい花となつて結実するのを観察し、管理するのは私自身の生きる喜びであつた。

\* \* \*

私が花に見とれていると、人の気配を感じた。庭の上の裏門に男が一人立って、そこから海を眺めていた。私が近付くと、気づいて挨拶した。私と同じくらいの年齢だが、杖をつき、小さい丸い帽子から白髪がはみ出して風になびいていた。

「バラの香りにひかれてこの道をたどつてきたのですがね、お宅の庭からのようですね」

「バラに興味がおありのようですね？」

「まあね、今は樹医で食っていますが、かつてはバラも専門としていました」

「ジュイ？」

「樹の医者ですね」

「じゃあ、植物のことなら詳しいでしょうね」

私は興味をひかれ、教えられることもあるだろうと、庭に招き入られた。

「ほう、この庭は自然のままの匂いがする」

と男は庭にしゃがみこんで土を手に取り、匂いを嗅いだ。

「馬糞の臭いかな」

「ひとつの庭には命あるものの密接な循環が、ほかのどこよりも緊密に、明確に、簡明に見てとれる。ヘルマン・ヘッセの言葉です。薬剤を使わない庭は、土と植物が独特の匂いをつくります。薬剤で殺菌されないから、菌類が土中に繁殖し、植物と共生します。まあキノコですね。自然の森も匂うでしょう。しかし、この香りはなんだろう。バラに違いないが、バラの香りなら大抵承知しているのだが・・・」

「このバラの香りでしょう」

私は遺言バラを指した。男はバラに近づくと、まるでシャーロット・ホームズのようにかがみこみ、しげしげと観察した。

「うーん、このバラ、見たことがない。なんとという名前ですか？」  
「私も知らないのです。父が英国にいた時の園芸仲間の英国人が帰国する父に贈呈したそうです。ウェールズの修道院の廃墟で発見され、ロンドンの王立キューガーデンにも一株だけ保存されている珍種だそうです。園芸好きの父が貴重だといって大切にし、私に遺言で残していったのですよ」

「花の系統はガリカ系、樹形はシュラブ、いや半つる性かな、香りは強烈なダマスク・いずれにしても近代バラが失った特質を保持しているいにしえの品種です」

「いわゆるオールド・ローズ？」

「東洋のバラと交配された一八六七年を画してオールド・ローズとモダン・ローズと定義されていますが、バラは古代から盛んに交配が行われていましたからね。十字軍は東洋のバラを香料用に持ちかえっただろうし、ナポレオン皇帝妃ジョセフィーヌはバラの保護や品種改良に情熱を傾けたことで有名だし、隔絶したいにしえの修道院などでも、存在を見せぬ神の代わりに、究極の美を自らの手で創造しようとした植物学的僧がいてもおかしくない。こういうバラは名も知れず、庭園、墓地や修道院、古城などでひそかに生き延び、ときどきバラ探求者に発見されます。彼らはこういう種を、アンテイク・ローズ、またはレジェンダリー・ローズと呼んでいます」  
男は手を伸ばし、株元の割れたクラウン（根元の膨らんだ部分）に触れた。

「台風で一昨年割られて、いまは半分になってましてね。でもクラウンからなにか、わかるのですか？」

男はしばらく眼を閉じ、医者が患者の体を触診するように、クラウンに手をあてていたが、

「わかりますとも。クラウンはこのバラの履歴です。大きさと形状から、樹齢、成長過程、健康状態など・・・いや、私にはもつとわかる。このバラが経験した苦しみ、悲しみ、痛み、喜び、愛・・・」  
「愛？ 愛は他に向けられるものでしょう」

「植物が、ほかの植物と交信するのを知っていますか？」

「アレロパシー？」

「よくご存じで」

「でもどういう手段で他と交信するのです？」

「これは今もって植物学上の謎です。数百メートルも離れた雌雄のある樹木同士が交信しているとしたら思えない実例もあります。地中の根が菌根菌を通じて絡み合い、何らかの物質を交換している可能性もある。アレロパシーは憎悪も伝えるのですよ。アカザなど普通の雑草は、他の植物を排除するために、なにか強烈な嫌忌物質を放出しているらしい」

「バラの場合は？」

「多分、愛、のほうでしょう」

「どうやって？」

「私の確信では、バラのアレロパシー、伝達物質は、（香り）です。香りによって、鳥も昆虫も、それから、あなたも私も、こうして引き寄せられてきた」

私はあらためて、芳香という愛を放つ、名もないバラを見た。私やこの樹医だけでなく、父も、知人の英国人も、ウェールズの修道院の僧侶たちも、このバラに惹かれ、愛し、慰められてきた。

「ご覧なさい、ほかのバラたちも呼び寄せられている。周りのつるバラたちは寄り添うようにこの老バラを取り囲んでいる。このバラは八十年近く生きてきた。寿命がもうすぐつきます」

「え？」

「皆さんはだれも、ある植物が寿命を全うして死ぬ、ということに関心がありません。本来の寿命がつかえる前に枯れたり、切られたりしてしまふことがほとんどだからです。私は樹医だから、樹木の生死に関与します。公園の老木を生き返らせてほしいと頼まれても、寿命がきていけば、復活できません。樹木の死に私はたびたび立ち会っている。このバラももうすぐ死ぬでしょう。さつきクラウンに触れて時にわかりました。でも惜しいなあ。もう少し若ければ接ぎ木か挿し木してこの貴重なバラの生命を継承できたのに。このバラは接ぎ木ではなく挿し木されていますね。クラウンに接ぎ木の跡がない」

「つまりクローンだったのですね」

「そうです。バラは挿し木されて生命を復活させ論理的には永遠に生きることができません。しかし残念ながら、この老バラは失われ。それで最後の力を振り絞って花を咲かせ、芳香を放ち、私たちを呼んだ。周りのバラたちも死期を知って、名もない老バラの臨終に寄り添って、立ち会おうとしているのでしよう」

「もし本当なら、名なしで死なせるのは不憫だなあ」

「戒名、つけますか？」

「ケルト、修道院、伝説、愛、か・・・伝説のアーサー王妃、グイネビア、はどうかね」

「いいですね、激しい愛に生きた女性ですからね」

私はふと不倫の波江さんを想像し、彼女のイメージを振り払い、それから男と握手した。

男は杖をついて去って行った。

それから数日して、グイネビアは花を落とした。葉をすこしつけたままだが、死ぬ様子はなかった。

ある朝、眠りの中でだれかが呼んでいるような気がした。隣のクリコさんのいびきかと思ったが、すやすやと寝ている。ベッドの脇の窓のそとが明るくなっている。数日続いた雨はあがったようだ。すこし開けた窓からいい香りが忍びこんでいた。

私は飛び起き、庭に出た。雨に洗われた庭は清々しかった。

グイネビアが大きな花をつけていた。

私はグイネビアに近づいた。むせるような芳香がグイネビアから立ち昇っていた。すると周囲のバラたちがそれに呼応するように一斉に香りを放った。

バラたちが交信しているのだ。

太陽が稜線からのぞいた。朝のやわらかな光が庭を目覚めさせた。グイネビアは光に抱かれた。

強烈な芳香が立ち上った。

これは音楽、グイネビアの最後の歌だ。それは死を恐れる歌ではなく、授かった長かった生命に感謝しているように思えた。周囲のバラたちがそれに和し、死にゆくバラを讃えて歌っていた。

朝日が動いていた。

グイネビアの花弁がすこし萎んだようだ。

すると、花首から、ぼつり、と落ちた。わずかな葉の残りがはらはらと散った。

私は、ある年老いたバラの臨終を見たのだ。

厳かで静かな生命の終わりを見た。

私は深く感動して、その場に立ちつくしていた。

\* \* \*

私は子供のころ、死が怖かった。やがて自分が死ぬ、ということを考える、体が震えるほど怖ろしかった。それは身近に迫った身体的な死ではなく、観念での死、想像での死、だったのだが。

その感覚を、「永遠の不在」の恐怖、と表現したのは大江健三郎だったと思う。

ターシャ・チューダーという、素朴で自然流の素敵な庭作りがテレビや本で紹介されて有名になったアメリカの老婦人がいた。庭を裸足で歩き、球根を食いつくすネズミたちと銃で戦い、しかし動物や花の絵本をたくさん描いた。私も彼女の庭に魅せられ、図書館で写真集を何度も借りた。

ターシャおばさんも九十歳を過ぎたころ、こういった。

「そろそろ、庭を自然に帰してやらなければいけないわね」

それから間もなくこの世を去った。

うちの庭は世界一美しい、と自慢していた庭の植物たちに、「もうあなたたちも自然に帰るのよ。私ももうすぐ自然に帰るのだから」と、死期を悟った心境だったのだと、私は理解している。

やはり、アメリカ婦人で、環境保護の勇敢な先駆者だったレイチエル・カーソンは死の間際、付き添った友人に、死は怖くないかと聞かれた。すると、婦人はこう答えた。

「とんでもない。私は今、生命のもっとも神秘的体験をするところなのよ」

私も七十四歳になった。生の終焉も間近だ。何人かの親しい者たちもすこしづつ、逝ってしまった。やがて自分の番がくるだろう。しかし、あの「永遠の不在」の恐怖は感じない。ターシャおばさんや、カーソンの言葉をときどき思いだすからかもしれない。

そして、生を全うさせたあのバラの、荘厳な死を思うと、私の心は安らぐ。